

【現代語訳】

ある人が言うことには、「基俊は俊頼のことを漢詩に暗い人であると言つて、『和歌が上手であると言つても、(俊頼の腕前は)老いた馬が道をよく覚えていようなものだろう』とおっしゃったので、俊頼はそれを聞いて、『高名な漢詩人である文時や朝綱は、和歌が上手ではない。和歌で有名な躬恒や貫之は漢詩が上手ではない』とおっしゃった」と言つた。また、次のようにも言つた。「雲居寺の僧が催した歌会で、秋の暮れを題材にして俊頼は次のように詠んだ：

秋が暮れてしまったとしても、それでもやはり秋風は訪れてきて、野辺の秋景色よ、冬景色に変わって
くれるなよ：

俊頼は、その名を隠して詠んだのだが、基俊はこの歌を『そうだ(俊頼が詠んだ歌だ)よ』と気が付いて、基俊は競争心が強い人なので、非難して言うことには、『どうしても歌は第三句の末尾に『て』の文字を置いてしまふと、とりたててよいことはない。つかえてひどく聞きにくいものだ』と、反論の口を開かせないほど激しく非難しなされたので、俊頼はとやかく言わないでいた。その席に伊勢の君琳賢が座っていて、『一風変わった証歌を一首覚えております』と口に出したので、基俊が『さあさあ、お聞きしましょう。全くよい歌ではないでしょう』と言ふので、

桜の花の散る木の下を吹いてくる風は寒くなって：

と、琳賢が最後の「で」の文字を長々と引いて読み上げたので、基俊は顔色が真っ青になって何も言えずにうつむいていたときに、俊頼朝臣はこっそりとお笑いになったということだ」